

## 妙法蓮華經。五百弟子受記品。第八

爾の時に富樓那彌多羅尼子、佛に従いたてまつりて是の智慧方便隨宜の説法を聞き、又諸の大弟子に阿耨多羅三藐三菩提の記を授けたもうを聞き、復宿世因縁の事を聞き、復諸佛の自在神通の力ましますことを聞きたてまつりて未曾有なることを得、心淨く踊躍し、即ち座より起つて佛前に到り、頭面に足を禮して却つて一面に住し、尊顔を瞻仰して目暫くも捨てず。而も是の念を作さく、

世尊は甚だ奇特にして所爲希有なり。世間若干の種性に隨順して、方便知見を以て爲に法を説いて、衆生處處の貪著を拔出したもう。我等佛の功德に於て、言をもつて宣ぶること能わず。唯佛世尊のみ能く我等が深心の本願を知しめせり。

爾の時に佛、諸の比丘に告げたまわく、

汝等是の富樓那彌多羅尼子を見るや不や。我常に其の説法人の中に於て最も第一たりと稱し、亦常に其の種種の功德を歎ず。

精勤して我が法を護持し助宣し、能く四衆に於て示教利喜し、具足して佛の正法を解釋して、大に同梵行者を饒益す。

如來を捨いてよりは、能く其の言論の辯を盡くすものなけん。汝等、富樓那は但能く我が法を護持し助宣すと謂うことなけれ。

亦過去九十億の諸佛の所に於ても、佛の正法を護持し助宣し、彼の説法人の中に於ても亦最も第一なりき。又諸佛所説の

空法に於て明了に通達し、四無礙智を得て常に能く審諦に、清淨に法を説いて疑惑あることなく、菩薩神通の力を具足

し、其の壽命に隨つて常に梵行を修しき。彼の佛世の人咸く皆、之を實に是れ聲聞なりと謂えり。而も富樓那は斯の方便を以て無量百千の衆生を饒益し、又無量阿僧祇の人を化して

阿耨多羅三藐三菩提を立てしむ。佛土を淨めんが爲の故に、常に佛事を作し衆生を教化しき。

諸の比丘、富樓那は亦七佛の説法人の中に於て第一なることを得、今我が所の説法人の中に於ても亦第一なることを爲。賢劫の中、當來の諸佛の説法人の中に於ても亦復第一にして、皆佛法を護持し助宣せん。亦未來に於ても、無量無邊の諸佛の法を護持し助宣し、無量の衆生を教化し饒益して、阿耨多羅三藐三菩提を立てしめん。佛土を淨めんが爲の故に、常に勤め精進し衆生を教化せん。漸漸に菩薩の道を具足して、無量阿僧祇劫を過ぎて、當に此の土に於て阿耨多羅三藐三菩提を得べし。號を法明如來・應供・正徧知・明行足・善逝・世間解・無上土・調御丈夫・天人師・佛・世尊といわん。

其の佛恒河沙等の三千大千世界を以て一佛土と爲し、七寶を地と爲し、地の平かなること掌の如くにして山陵・谿澗・溝壑あることなけん。七寶の臺觀其の中に充滿し、諸天の宮殿近く虚空に處し、人・天交接して兩つながら相見ることを得ん。諸の惡道なく亦女人なくして、一切衆生皆以て化生し姪欲あることなけん。大神通を得て、身より光明を出し飛行自在ならん。志念堅固に精進・智慧あつて、普く皆金色に、三十二相をもつて自ら莊嚴せん。其の國の衆生は常に二食を以てせん。一には法喜食、二には禪悅食なり。無量阿僧祇千萬億那由他の諸の菩薩衆あり、大神通・四無礙智を得て善能衆生の類を教化せん。其の聲聞衆、算數校計すとも知ること能わざる所ならん。皆六通・三明及び八解脫を具足することを得ん。其の佛の國土は是の如き等の無量の功德あつて莊嚴し成就せん。劫を寶明と名け、國を善淨と名けん。其の佛の壽命、無量阿僧祇劫にして、法住すること甚だ久しからん。佛の

滅度の後七寶の塔を起てて其の國に徧滿せん。

爾の時に世尊、重ねて此の義を宣べんと欲して、偈を説いて  
言わく、

諸の比丘諦かに聽け 佛子所行の道は

善く方便を學せるが故に 思議することを得べからず

衆の小法を樂つて 大智を畏るることを知れり

是の故に 諸の菩薩 聲聞・緣覺と作り

無數の方便を以て 諸の衆生類を化して

自らは是れ聲聞なり 佛道を去ること甚だ遠しと説く

無量の衆を度脱して 皆悉く成就することを得せしむ

小欲懈怠なりと雖も 漸く當に作佛せしむべし

内に菩薩の行を祕し 外に是れ聲聞なりと現す

小欲にして生死を厭えども 實には自ら佛土を淨む

衆に三毒ありと示し 又邪見の相を現す

我が弟子是の如く 方便して衆生を度す

若し我具足して 種種の現化の事を説かば

衆生の是れを聞かん者 心に則ち疑惑を懷かん

今此の富樓那は 昔の千億の佛に於て

所行の道を勤修し 諸佛の法を宣護し

無上慧を求むるを爲て 諸佛の所に於て

弟子の上に居し 多聞にして智慧ありと現じ

所説畏るる所なくして 能く衆をして歡喜せしめ

未だ曾て疲倦あらずして 以て佛事を助く

已に大神通に度り 四無礙慧を具し

衆根の利鈍を知つて 常に清淨の法を説き

是の如き義を演暢して 諸の千億の衆を教え

大乘の法に住せしめて 自ら佛土を淨め

未來にも亦 無量無數の佛を供養し

正法を護り助宣して 亦自ら佛土を淨め

常に 諸の方便を以て 法を説くに畏るる所なく

不可計の衆を度して 一切智を成就せしめん

諸の如來を供養し 法の寶藏を護持して

其の後に成佛することを得ん 號を名けて法明といわん

其の國を善淨と名け 七寶の合成せる所ならん

劫を名けて寶明とせん 菩薩衆甚だ多く

其の數無量億にして 皆大神通に度り

威徳力具足して 其の國土に充滿せん

聲聞亦無數にして 三明・八解脱あつて

四無礙智を得たる 是れ等を以て僧とせん

其の國の 諸の衆生は 姪欲皆已に斷じ

純一に變化生にして 相を具し身を莊嚴せん

法喜・禪悅食にして 更に餘の食想なけん

諸の女人あることなく 亦 諸の惡道なけん

富樓那比丘 功德悉く充滿して

當に斯の淨土の 賢聖衆甚だ多きを得べし

是の如き無量の事 我今但略して説く

爾の時に千二百の阿羅漢の心自在なる者、是の念を作さく、

我等歡喜して未曾有なることを得つ。若し世尊各授記せらる

ること餘の大弟子の如くならば亦快からずや。

佛此れ等の心の所念を知しめして、摩訶迦葉に告げたまわ

く、是の千二百の阿羅漢に、我今當に現前に次第に阿耨多羅三

藐三菩提の記を與え授くべし。此の衆の中に於て我が大弟子

憍陳如比丘、當に六萬二千億の佛を供養し、然して後に佛に

成爲ることを得べし。號を普明如來・應供・正徧知・明行足・

善逝・世間解・無上士・調御丈夫・天人師・佛・世尊といわん。  
其の五百の阿羅漢、優樓頻螺迦葉・伽耶迦葉・那提迦葉・  
迦留陀夷・優陀夷・阿菟樓駄・離婆多・劫賓那・薄拘羅・周陀・  
莎伽陀等、皆當に阿耨多羅三藐三菩提を得べし。盡く同じく  
一號にして名けて普明といわん。

爾の時に世尊、重ねて此の義を宣べんと欲して、偈を説いて  
言わく、

憍陳如比丘 當に無量の佛を見たてまつりて

阿僧祇劫を過ぎて 乃ち等正覺を成ずべし

常に大光明を放ち 諸の神通を具足し

名聞十方に徧じ 一切の敬う所として

常に無上道を説かん 故に號けて普明とせん

其の國土清淨にして 菩薩皆勇猛ならん

咸く妙樓閣に昇つて 諸の十方の國に遊び

無上の供具を以て 諸佛に奉獻せん

是の供養を作し已つて 心に大歡喜を懷き

須臾に本國に還らん 是の如き神力あらん

佛の壽六萬劫ならん 正法住すること壽に倍し

像法復是れに倍せん 法滅せば天・人憂えん

其の五百の比丘 次第に當に作佛すべし

同じく號けて普明といひ 轉次して授記せん

我が滅度の後に 某甲當に作佛すべし

其の所化の世間 亦我が今日の如くならん

國土の嚴淨 及び 諸の神通力

菩薩・聲聞衆 正法及び像法

壽命劫の多少 皆上の所説の如くならん

迦葉汝已に 五百の自在者を知りぬ

餘の諸の聲聞衆も亦當に復是の如くなるべし

其の此の會に在らざるは汝當に爲に宣説すべし

爾の時に五百の阿羅漢、佛前に於て受記を得已つて歡喜踊躍し、即ち座より起つて佛前に到り頭面に足を禮し、過を悔いて自ら責む。世尊、我等常に是の念を作して、自ら已に究竟の滅度を得たりと謂いき。今乃ち之を知りぬ、無智の者の如し。所以は何ん、我等如來の智慧を得べかりき。而るを便ち自ら小智を以て足りぬと爲しき。

世尊、譬えば人あり、親友の家に至つて酒に酔うて臥せり。是の時に親友官事の當に行くべきあつて、無價の寶珠を以て其の衣の裏に繋げ之を與えて去りぬ。其の人酔い臥して都て覺知せず、起き已つて遊行し他國に到りぬ。衣食の爲の故に勤力求索すること甚だ大に艱難なり。若し少し得る所あれば便ち以て足りぬと爲す。後に親友會い遇うて之を見て、是の言を作さく、咄哉、丈夫、何ぞ衣食の爲に乃ち是の如くなるに至る。我昔汝をして安樂なることを得、五欲に自ら恣ならしめんと欲して、某の年月日に於て無價の寶珠を以て汝が衣のに繋げぬ。今故お現にあり。而るを汝知らずして、勤苦・憂惱して以て自活を求むること、甚だこれ癡なり。汝今此の寶を以て所須に貿易すべし。常に意の如く乏短なる所なかるべしといわんが如く、佛も亦是の如し。菩薩たりし時我等を教化して、一切智の心を發さしめたまいき。而るを尋いで廢忘して知らず覺らず。既に阿羅漢道を得て自ら滅度せりと謂い、資生艱難にして少しきを得て足りぬとなす。一切智の願猶お在つて失せず。今者世尊我等を覺悟して、是の如き言を作したまわく

諸の比丘、汝等が得たる所は究竟の滅に非ず。我久しく汝等をして佛の善根を種えしめたれども、方便を以ての故に

涅槃の相を示す。而るを汝これ實に滅度を得たりと謂えり。  
 世尊、我今乃ち知んぬ、實に是れ菩薩なり。阿耨多羅三藐三  
 菩提の記を授けたもうことを得つ。是の因縁を以て甚だ大に  
 歡喜して未曾有なることを得たり。

爾の時に阿若憍陳如等、重ねて此の義を宣べんと欲して、偈を  
 説いて言さく

我等無上 安穩の授記の聲を聞きたてまつり

未曾有なりと歡喜して 無量智の佛を禮したてまつる

今世尊の前に於て 自ら 諸の過咎を悔い

無量の佛寶に於て 少しき涅槃の分を得

無智の愚人の如くして 便ち自ら以て足りぬと爲しき

譬えば貧窮の人 親友の家に往き至りぬ

其の家甚だ大に富んで 具に 諸の肴膳を設け

無價の寶珠を以て 內衣の裏に繫著し

黙し與えて捨て去りぬ 時に臥して覺知せず

是の人既已に起きて 遊行して他國に詣り

衣食を求めて 自ら濟り 資生甚だ艱難にして

少しきを得て 便ち足りぬとなして 更に好き者を願わず

內衣の裏に 無價の寶珠あることを覺らず

珠を與えし親友 後に此の貧人を見て

苦切に之を責め已つて 示すに繫けし所の珠を以てす

貧人此の珠を見て 其の心大に歡喜し

富んで 諸の財物あつて

五欲に而も自ら 恣ならんが如く

我等も亦是の如し 世尊長夜に於て

常に慙んで教化せられ 無上の願を種えしめたまえり

我等無智なるが故に 覺らず亦知らず

少しき涅槃ねはんの分ぶんを得えて 自みずから足たりぬとして餘よを求もとめず  
今佛いまほとけ我われを覺悟かくごして 實じつの滅度めつどに非あらず  
佛ほとけの無上むじょう慧えを得えて 爾してこうして乃すなわち爲これ眞しんの滅めつなりとのたも言うう  
我われ今佛いまほとけに從したがつて 授記じゆき・莊嚴しやうごんの事じ  
及および轉次てんしに受決じゆけつせんことを聞ききたてまつりて  
身しん心じん徧あまねく歡喜かんぎす